

戦前期日本におけるコメニウス言説再考 6

教育学科 相馬 伸一

抄録

本論文は、戦前期日本におけるコメニウスに関する言説の包括的な調査の一環である。国民教育制度が確立された19世紀後半、近代教育の先駆者として、17世紀チェコの思想家ヨハネス・コメニウスが日本に紹介された。その過程の調査は、日本における西洋教育の受容のより深い理解に資するものである。昨年リニューアルした国立国会図書館のデジタルコレクションにより、さまざまな文献における特定の単語の横断的な調査が可能になった。たとえば、1882年に発行された『千葉教育会雑誌』に掲載されたコメニウスに関する記事は、日本で最初の教育事典の編纂に携わった木村一歩（1850-1901）によるものであることが明らかとなった。本稿では、これまでの研究の対象期間でフォローできなかったいくつかの事実について提示する。

Key Words : コメニウス, 西洋教育受容, 教育思想史, 戦前期日本, メタヒストリー

はじめに

本稿は、『佛教大学教育学部論集』第31号（2020年3月）所収の拙稿「戦前期日本におけるコメニウス言説再考」、『佛教大学教育学部学会紀要』第19号（2020年3月）所収の拙稿「戦前期日本におけるコメニウス言説再考2」、『佛教大学教育学部論集』第32号（2021年3月）所収の拙稿「戦前期日本におけるコメニウス言説再考3」、『佛教大学教育学部論集』第33号（2022年3月）所収の拙稿「戦前期日本におけるコメニウス言説再考4」、『佛教大学教育学部論集』第34号（2023年3月）所収の拙稿「戦前期日本におけるコメニウス言説再考5」の続編である。

17世紀チェコの思想家ヨハネス・アモス・

コメニウス（Johannes Amos Comenius, 1592-1670. チェコ語表記では、ヤン・アーモス・コメンスキー（Jan Ámos Komenský））は、教育以外でも神学・哲学・自然学・歴史・文学・言語・政治等にわたって重要な事績を残している。しかし、欧米各国で国民教育制度が成立した19世紀、教員養成の教科書として書かれた教育史（教育思想史）において近代的な教育の先駆者として記述され、コメニウスは日本ではもっぱら教育家としてあつかわれてきた。ここには、歴史が書かれるのにもとなう歴史的問題、いわばメタヒストリー的問題がある。本研究は、明治からおおよそ1945年までに発行された書籍や雑誌記事に現れたコメニウスに関する言説を現れた順に再構成し、調べがついた限りで概要等を付して若干の考察を加えるものである。

井ノ口淳三氏(追手門学院大学名誉教授)によって日本教育学会紀要『教育学研究』第44巻第3号(1977年)、『追手門学院大学人間学部紀要』第8号(1999年)及び日本コメニウス研究会年報『日本のコメニウス』(第1号, 1991年～第20号, 2010年)に発表された目録に未収録の論考については「*」を付す。また、教育史(教育思想史)の通史テキストのように、紹介に値すると考えられるものは「番外」としてあつかう(この段落は、理解の便宜のために、各連載に共通している)。

2022年5月から「個人向けデジタル化資料送信サービス」(個人送信)が開始された「国立国会図書館デジタルコレクション」が、同年12月21日にリニューアルオープンし、以前と比べて数十倍の文書がデジタル化された。これによって、各種の文献において特定の語がどのように使用されたか等を横断的に調査できるようになった。もちろん、あらゆる文書がデジタル化されたわけではない。たとえば、複製によって複数の機関に所蔵されている文献はデジタル化されていない場合がある。ゆえに、同コレクションに過剰に頼るべきではない。しかし、実際、同コレクションの参照によって、これまでの調査結果の修正や補足が必要になった。本稿では、それらのうちとくに重要と思われるものを示す。

なお、読みやすさの便を考慮し、引用文の旧字体と旧かな遣いは基本的に現代表記とし、一部の漢字表記をかな表記に改め、括弧の省略や人名表記の統一をはかり、漢数字表記を算用数字表記に改めたほか、ルビを振ったり読点を補ったりした箇所があることをお断りする。また、西洋史や西洋教育史で比較的良好に知られた人物の原語表記や生没年は割愛した。引用者による補足は〔 〕で示した。

補足 1. 『千葉教育会雑誌』所収「コメニウス氏畧傳」(1882年)の典拠と著者について

拙稿「戦前期日本におけるコメニウス言説再考」で論じたように、1882年創刊の『千葉教育会雑誌』の第8号、第9号、第10号にわたって、「賢哲畧傳」と題された連載の一部として掲載された「コメニウス氏畧傳」は、その記述の詳細さに加え、明治前期における地方の西洋教育摂取熱を示すものである。にもかかわらず、「コメニウス氏畧傳」には著者名も典拠も示されておらず、この点は本研究の課題のひとつであった。

しかし、今回、国立国会図書館デジタルコレクションを改めて参照したところ、「コメニウス氏畧傳」とほとんど同じ内容の記述が、1880年12月に文部省が発行した『教育辞林』第5冊に含まれていた。『教育辞林』は、日本における西洋教育受容において重要な書物であり、この参照を怠っていたのは迂闊という以外にない。当時、コメニウスがしばしば「コメニウス」と表記されていたことから、「コメニウス」で検索したところ、この事実が判明した。

『教育辞林』は1880年から1885年にかけて全21冊が出版された。第4冊までは、小林小太郎(1848-1904)、第5冊からは木村一步(1850-1901)が翻訳した。

小林小太郎は、伊予松山藩士の家に生まれ、12歳でイギリス公使館に預けられて英語を学び、明治維新後は、1885年まで文部省にあって欧米の多くの教育資料を翻訳した。そのなかには、アメリカで最初の教育学教授となったウィリアム・ペイン(William Harold Payne, 1836-1907)の*Contributions to the Science of Education* (New York, Harper & brothers, 1886)を翻訳した『波氏教育学』(学海指針社, 1888年)がある。

木村一步は、現在の三重県鳥羽に生まれ、慶應義塾に学び、文部省の教科書編成課や編輯局に勤務した。『改正官員録』(明治19年上12月、彦根正三編、博公書院)によれば、後述の山縣悌三郎と同時期に文部省にいた。1892年までは文部省に在籍しており、1901年刊の『慶應義塾学報』第42号にはその死去について記されている(99頁)。

『教育辞林』の底本は、アメリカで1877年に出版された『教育事典』(*The Cyclopaedia of Education: Dictionary of Information for the Use of Teachers, School Officers, Parents, and Others*, New York: E. Steiger)である。編者は、アメリカの教育家ヘンリー・キドル(Henry Kiddle, 1824-1891)とドイツ生まれで後にアメリカで活動したアレクサンダー・スケーム(Alexander Jacob Schem, 1826-1881)である。キドルは1870年にニューヨーク市の教育長となっている。スケームは、アメリカに渡ったのち、出版社で辞書編纂に携わるかたわら、ニューヨーク市の教育長補佐を務めた。ボン大学とテュービンゲン大学で神学と文献学を学んだ経歴を有するスケームは、この辞典の編纂に不可欠だったドイツ語文献の参照に大きな存在だったに違いない。

木村一步が翻訳した『教育辞林』第5冊におけるコメニウスに関する記述は81ページから88ページにわたっているが、その内容は、前稿で「コメニアス氏畧傳」の記述の特質としてあげた21のポイントをすべて含んでいる[相馬 2020a: 40-44]。12番目のポイントとして示した、コメニウスのパンソフィア(汎知学)の学問構成の一部としてあげられた「ユニヴァルサルドグマナチック」が、『教育辞林』では「ユニヴェルサル・ドグマチック」となっていた以外は、細かい記述や表記も一致していた。「ドグマナチック」は『千葉教育会雑誌』に転載する過程で生じた誤記だろう。

ただ、『千葉教育会雑誌』の記事は、『教育辞林』の完全な転載ではなく、ところどころ省略されている。たとえば、『教育辞林』では、『大教授学』(*Didactica magna*)、『言語の最新の方法』(*Novissima linguarum methodus*)、『教授学著作全集』(*Opera didactica omnia*)のラテン語表題がカタカナ表記されているが、『千葉教育会雑誌』では略されている。『教育辞林』における『世界図絵』(*Orbis pictus*)の初版年は1657年と誤っており、『千葉教育会雑誌』への転載の際の省略がプラスに働いている場合もある。とはいえ、『教育辞林』におけるコメニウスの紹介がはるかに詳しいのは明らかである。この紹介は、量的に見ても質的に見ても、日本におけるコメニウス受容の最初期の頂点であるといえる。

念のため、『千葉教育会雑誌』の「賢哲畧傳」でとりあげられた9人を『教育辞林』に見出すことができるかどうか確認したが、ルイ・アガシー(Jean Louis Rodolphe Agassiz, 1807-1873, 第1冊, 19頁)、アリストテレス(第2冊, 19頁)、フランシス・ベーコン(第3冊, 2頁)、アンドリュー・ベル(第3冊, 35頁)、ウォレル・コルバーン(Warrell Colburn, 1793-1833, 第5冊, 36頁)、コメニウス(第5冊, 81頁)、フィヒテ(第10冊, 47頁)、フレーベル(第10冊, 128頁)は記載されていた一方、ペスタロッチの記述が見当たらなかった。『教育辞林』は基本的にアルファベット順に翻訳が進められたが、第10冊でF、第21冊でもNまでで、Pで始まる事項を含む全編の完結には至らなかった。

『教育辞林』の21冊で、『千葉教育会雑誌』の「賢哲畧傳」でとりあげられた以外の人物を、おおよそ年代順に並べると、アウグスティヌス、カール大帝、アルクイヌス、エラスムス、モンテーニュ、アスカム、イエズス会、メランヒトン、ブーゲンハーゲン、ミルトン、ロック、バ

ゼドウ、カンペ、フェヌロン、ラサール、ゲーテ、ギゾー、カント、ヘルダー、ヘーゲル、ヘルバルト、フンボルト、ランカスター、ホールズ・マン、ディースターヴェーク、オルコット、エマーソン等の西洋教育史によく登場する人物が見出される。

コメニウス関係では、その協働者のサミュエル・ハートリブ (Samuel Hartlib, 1600-1662) が独立にとりあげられている (第13冊, 20～21頁)。ただし、ジョン・ミルトンに教育論の執筆を求めたことが主で、コメニウスとの関係についての言及はない。他方、第20冊で独立の項目としてあつかわれているモラヴィアン・プレスレンについては、ヤン・フスに由来するチェコ兄弟教団が旧派、18世紀に再興したモラヴィア兄弟教団が改正派として説明され、前者に関してはコメニウスの事績も紹介されている (108～119頁)。

木村は、文部省退官後、未完のままの『教育辞林』をもとに、さらに日本や中国の教育家や日本の教育事項を加えた『教育辞典』の編纂にとりくみ、それは1893年に博文館から出版された。こちらの西洋教育家の紹介は、『教育辞林』には収められなかった、ソクラテス、プラトン、セネカ、クインティリアヌス、ルター、ラートケ、ルソー、ザルツマン、ペスタロッチ、ニーマイヤー、ラウマー、スペンサーを含め、おおよそ時代順に列挙されている。

コメニウスの項目 (811～813頁) は、底本 *The Cyclopedia of Education* の記述 (159～161頁) に基づきながら、『教育辞林』第5冊の記事をさらに簡略化したもので、コメニウス没後200年を記念して現在のチェコ共和国プシェロフにコメニウスの石像が建立された記述は割愛されている。

『教育辞典』のペスタロッチの項目 (826～829頁) は、他の項目と同様、底本の記述 (693～695頁) に対応しているが、『千葉教育会雑誌』

「賢哲畧傳」の「ペスタロッチ略傳」とは一致しない箇所が多い。たとえば、『教育辞典』とその底本では、ルソーの『エミール』の影響に言及されているほか、生涯のエピソードも詳細であるのに対して、「ペスタロッチ略傳」の記述は『エミール』についての言及がなく、生涯についての記述はほとんどない。『千葉教育会雑誌』の「賢哲畧傳」にとりあげられている人物は、ペスタロッチ以外は姓の頭文字がN以前であり、「賢哲畧傳」の冒頭を飾ったペスタロッチの記事のみは、『教育辞林』の訳稿に基づいていなかった可能性が高い。

さて、『教育辞林』の底本である *The Cyclopedia of Education* の記述の詳細さが何によるものなのかを見ておく。紹介記事の最後に参考文献として以下の7点があげられている。調べのついた限りで書誌情報を補って示す。

①Karl von Raumer, *Geschichte der Pädagogik vom Wiederaufblühen klassischer Studien bis auf unsere Zeit*, Stuttgart 1843-1851, 3 Bde; 5. Auflage Gütersloh 1878-80, 4 Bde.

教育史家カール・フォン・ラウマー (1783-1865) の主著。ヘンリー・バーナード (Henry Barnard, 1811-1900) による英訳として *German Teachers and Educators* があげられているが、これは、*Memoirs of Eminent Teachers and Educators. With Contributions to the History of Education in Germany*, Hartford: Brown & Gross, revised edition, 1878. のことを指すだろう。

②František Palacký, *Jahrbücher des Böhmisches Museums*, Prag, 1829.

チェコ国民の父と称されるフランティシェク・パラツキー (1798-1876) 編集の『チェコ博物館年報』。

③Carl Theodor Lion (übersetzt), *Joh. Amos Comenius' Große Unterrichtslehre*. In: *Bibliothek pädagogischer Klassiker*, Lagensalza:

Hermann Beyer und Söhne, 1875.

『大教授学』のドイツ語訳のひとつ。訳者のカール・テオドール・リオン (1838-1901) は、ドイツの古典学者のハインリヒ・リオン (Heinrich Albert Lion, 1796-1867) の息子で体育教師である。

④Julius Beeger & František Jan Zoubek (übersetzt), *Grosse Unterrichtslehre*. In: Karl Richter (hrsg.) *Pädagogische Bibliothek*, Leipzig: Siegismund und Volkenig, 3. Ausgabe, 1875.

こちらも『大教授学』のドイツ語訳のひとつ。訳者のユリウス・ベーゲル (1829-1899) はドイツの教育者でコメニウス研究者としてライプツィヒ教師協会にコメニウス図書館の設置を提唱した¹⁾。フランティシェク・ゾウベク (1832-1890) はチェコのエリートで作家であり、19世紀チェコのコメニウス・リバイバルを牽引した一人である。

⑤Johann Leutbecher, *Johann Amos Comenius' Lehrkunst: nach ihrer Gedankenfolge dargestellt*, Leipzig: Wilhelm Baensch, 1853.

ヨハン・ロイトベハー (1801-1878) はエアランゲン大学の私講師などを務めた経歴のある作家で、『ゲーテのファウストについて』 (*Über den Faust von Göthe*, 1838) 等の著作がある。

⑥Anton Gindely, *Über des Johann Amos Comenius Leben und Wirksamkeit in der Fremde*, in the proceedings of the Vienna Academy of Science, Vienna, 1855.

アントン (アントニーン)・ギンデリー (1829-1892) はチェコの歴史家で、チェコ兄弟教団や三十年戦争に関する多くの著作を残した。

⑦Robert Hebert Quick, *Essays on Educational Reformers*, London: Longmans, Green, and Co., 1868.

ロバート・クイック (1831 -1891) は、イギリスの教育家で、ハロー校を経てケンブリッジ

大学に学び、同大学で初めて教育史を講じたほか、教員養成に携わった。本書は、1868年の初版以来、何度も再版され、1890年に大幅な増補が加えられた。

The Cyclopedia of Education の記述には、いくつかの問題点があり、いずれも『教育辞林』の記述に引き継がれている。19世紀中の伝記によく見られる没年が1671年という記述 (正しくは1670年) はよいとして、ポーランドのレシュノ滞在中に『大教授学』のドイツ語版を完成させたというのは、おそらくラテン語の誤記だろうが、大きな誤りである。また、この著作の一部が『パンソフィアの先駆け』 (*Pansophiae prodromus*) との表題でイギリスの友人によって出版されたとあるが、『大教授学』とパンソフィアの著作は別個のものであり、正しくない。コメニウスは、パンソフィアを構成する分野として、パンソフィア、パンヒストリア、パンドグマティアをあげているが、パンドグマティアが *Universal Dogmatic* と英訳されているのはよしとしても、それが一種の心理学と説明されているのも誤りである。コメニウス没後200年を記念したブシェロフにおけるコメニウス像の設置は1875年8月23日となっているが、正しくは1874年である。

The Cyclopedia of Education のコメニウス紹介記事の末尾にあげられている参考文献の記述をひとつひとつ確認したが、そのうちでは、とくに文献④が参照された可能性が高い。というのは、拙稿「戦前期日本におけるコメニウス言説再考3」でも言及したように [相馬 2021: 22]、冒頭のコメニウスの伝記の14ページのページ末注に、前稿で紹介したライプツィヒの新聞記事を援用したブシェロフにおけるコメニウス像建立についての言及があるからである。さらに、同じ伝記部分の61ページに「普遍的書物 (*universale Bücher*) (パンソフィア、パンヒストリア、パンドグマティア)」という記

述があった。また、119 ページでは、パンヒストリアは「世界史」(Weltgeschichte)、パンドグマティアは「一般教義」(allgemeine Dogmatik)と訳されている。universale Bücher という記述は、パンドグマティアが universal dogmatic と英訳される際に参考にされたのではないだろうか。また、コメニウス像建立の年代は、文献④では正しく 1874 年となっている。同書の第3版は 1875 年刊だが、1 年前の出来事が掲載されていることになる。*The Cyclopaedia of Education* で 1875 年となっているのは、おそらく記事作成の段階で誤記が生じたのだと思われる。

以上から、*The Cyclopaedia of Education* におけるコメニウスについての詳細な記述は、ベーゲルとゾウバクによる著作等を参照して書かれたと考えられる。それが、わずか 5 年後に木村一步によって『教育辞林』第5冊で邦訳され、さらにその2年後に『千葉教育会雑誌』掲載の「コメニウス氏畧傳」にはほぼ転載されたということなのだろう。「コメニウス氏畧傳」が木村自身によるものなのか、あるいは『千葉教育会雑誌』の編集者によるものなのかはわからない。しかし、「賢哲畧傳」のペスタロッチの記事が *The Cyclopaedia of Education* を参照したとは判断しがたいことからして、『千葉教育会雑誌』のコメニウスの記事は、木村の訳稿を編集者が利用したものと考えるのが自然だろう。木村自身が「賢哲畧傳」を執筆したのなら、手元にあった *The Cyclopaedia of Education* に所収のペスタロッチの記事を参照しただろう。

日本における西洋教育受容における *The Cyclopaedia of Education* とその翻訳である『教育辞林』の影響力は他にも指摘できる。たとえば、「教育格言 Educational Aphorisms」の項(68～84頁)には、コメニウスはもちろん、プラトン、アリストテレス、セネカ、クインティリアヌス、モンテーニュ、ルター、エラスムス、ミルトン、ロック、ルソー、カント、ペスタロッ

チ、ホーレス・マンらの格言があげられているが、この格言の部分がとりだされて、『教育格言』(林守清編、片野東四郎出版、1882年)のような独立の出版物が現れている。拙稿「戦前期日本におけるコメニウス言説再考2」では原著の確認に至らなかったが[相馬 2020b: 42]、『欧米大家教育格言』(渡辺嘉重、金松堂、1887年)も、その内容からして、*The Cyclopaedia of Education* の教育格言を人名別に配列して冒頭に人物の簡単な紹介を加えたものではないかと考えられる。

そして、「教育格言」は、地方教育会の雑誌に転載されている。新型コロナウイルス感染の影響で調査が停滞しているが、現在までの調査に限っても、『巖手学事彙報』(1885年発行の5, 6, 10号)、『山梨教育学会雑誌』(1885年発行の16, 17, 18号)で教育格言が紹介されていた。

『教育辞林』がコメニウスに関する言説の伝播に与えた影響を考えると、当時、編纂された教育関係の事典(辞典、辞書)でコメニウスとその周辺がいかに扱われたかも、本研究でフォローすべきだろう。稿を改めて検討することとしたい。

補足2. 山縣悌三郎、『コメニウス氏伝及び教育説』について

拙稿「戦前期日本におけるコメニウス言説再考2」で、山縣悌三郎(1859-1940)のコメニウス論について検討した。山縣の自伝を編纂した荻野富士夫氏は、その解説「山縣悌三郎小論」で次のように記していた。

「山縣は1886(明治19)年、まず教育叢書を企画し、ついで『理科仙郷』全10巻を刊行する。前者は、『教授之得失』『教育哲学史』『習慣論』『ペスタロッチ氏の主義及応用』『フレーヴェル氏小伝及幼稚園』『コメニウス氏伝及び教育説』などであり、合わせて『進化要論』『男女淘汰論』という進化論関係の著作もものする。」[荻野

1987: 199]

荻野氏が記すように、1880年代に『コメニウス氏伝及び教育説』が出版されていたとすると、日本におけるコメニウスを扱った最初の単独の書物は眞田幸憲編の『近世教育の母 コメニウス』（金港堂書籍、1904年）であるという通説は改められることになる。そこで、各種の出版目録、当時の教育雑誌の広告、さらに荻野氏への照会等によって調査したが、確たる情報は得られず、この著作が幻であった可能性を指摘しておいた[相馬 2020: 45]。

しかし、今回、この推測がほぼ確実であることを示す情報が得られた。国立国会図書館デジタルコレクションで検索したところ、『官報』1291号（1887年10月15日）と『官報』1321号（同年11月22日）に以下のような記載があった。

〔西暦 1884 年刊行〕

題名 エキストラクト、フロム、ゼ、エッセース、オン、エヂュケーションル、レフォルメルス
教育叢書 コメニウス氏伝並に其の教育説

著 クイック氏

訳修 山縣悌三郎 同〔東京を指す〕

出版 辻 敬之

〔中略〕

右本日版權を免許す。

明治 20 年 10 月 11 日 内務省」(『官報』1291 号, 156頁)

〔西暦 1884 年刊行〕

題名 エキストラクト、フロム、ゼ、エッセース、オン、エヂュケーションル、レフォルメルス
教育叢書 コメニウス氏伝並に其の教育説

著 クイック氏

訳修 山縣悌三郎 東京

出版 辻 敬之

右版權を返納す。

明治 20 年 11 月 17 日 内務省」(『官報』1321 号, 215頁)

ここに明らかなように、10月に版權が免許されたのが、わずか1か月ほどで返納されている。明治政府は1869年に出版条例を定め、1872年、1875年の改正を経て、1887年12月には版權条例が成立したが、山縣がコメニウスについての著作の出版を意図したのはその法改正の直前にあたる。

1875年改正の出版条例の第2条では、「図書を著作または外国の図書を翻訳して出版するときは30年間の専売の権を与うるべし、この専売の権を版權という」と版權について定め、「版權は願うと願わざるとは本人の随意とす故に、版權を願う者は願書を差し出し免許を請うべし、その願わざる者は各人一般に出版するを許す」として、版權の取得によらない出版を認めた。しかし、第1条に「図書を著作し、または外国の図書を翻訳して出版せんとする者は出版の前に内務省へ届け出べし」とあるように、内務省への届け出が義務づけられていた(明治8年9月、太政官布告、第135号)。

山縣は、出版願だけではなく版權願を内務省に提出して免許を得たものの、出版を取りやめ、版權を内務省に返納したことになる。出版条例には返納については明文化されていないが、内務省編『版權書目』には、「内務省から版權授与されたもの及び一旦授与された版權を内務省に返納したものを収録」しているという[郡司 1986: 3]。ただし、この書目に収められているのは、1876年7月から1883年6月刊までのもので、山縣による版權返納の事例は収められていない。しかし、こうした返納の一例であったことは間違いないだろう。これによって、『コメニウス氏伝並に其の教育説』の出版計画はあったものの、単行本としての出版は断念されたと判断できよう。

ただ、出版予定だったことは間違いない。以前の調査では見出せなかったが、山縣の著作である『男女淘汰論』(普及社、1887年9月12

日版權免許, 同 11 月出版) の巻末に, ペスタロッチ, フレーベルの紹介書とともに, 『コメニウス氏伝及び教育説』の広告が掲載されていることを確認した。

さらに, 官報の記載からは, 山縣が執筆に用いようとした底本が明らかになった。「クイック」とは前出のロバート・クイックである。彼の主著 *Essays on Educational Reformers* (初版 1868 年, 増補初版 1890 年) は, 官報にカタカナ表記されている題目とは完全には一致しないが, 「エキストラクト, フロム, ゼ」というのは, 山縣が同書の一部であるコメニウスの章を翻訳編纂して出版しようとしたことを意味している。

ちなみに, 山縣が底本に予定した 1884 年版の原著の構成は, 1. イエズス会学校 (18頁), 2. アスカム, モンテーニュ, ラートケ, ミルトン (22頁), 3. コメニウス (25頁), 4. ロック (28頁), 5. ルソーの『エミール』 (43頁), 6. パゼドウと汎愛派 (18頁), 7. ペスタロッチ (41頁), 8. ジョセフ・ジャコト (Joseph Jacotot, 1770-1840, フランスの教育者) (29頁), 9. ハーバート・スペンサー (33頁), その後に, 子どもへの教授についての考察と示唆 (22頁), 道徳・宗教教育に関する諸見解 (12頁), 補遺 (50頁) となっている (ページ数は概算)。補遺には, コメニウスの『開かれた言語の扉』 (*Janua linguarum reserata*) の抜粋が収められている。構成からも明らかなように, 近世から近代初頭の西洋教育思想家がバランスよくとりあげられており, 山縣がコメニウスの部分を訳出して出版していれば, 他の部分にも関心が及んだであろう。

山縣悌三郎については自伝が出版されており, 事績やそれらについての思考の跡をうかがうことができる。しかし, 彼自身が参照した洋書や遺稿が伝わっていれば, 興味深い考察対象である。そこで, 彼の子孫とのコンタクトがとれないか種々試みたが, 個人情報保護が重視されている昨今, それは容易ではなかった。

しかし, 国立国会図書館デジタルコレクションで検索を繰り返していった結果, 海軍兵学校に学び, イタリア大使館附駐在武官, 宮内省式部官を務めた山縣の二男・武夫 (1884-1968) に 4 人の子息がいることが確認できた。居住地と思われる東京都の区役所や図書館をはじめ, 勤務先を継承すると思われる企業にも照会したが, 手がかりは得られなかった。しかし, 武夫の四男の實氏 (1929 年生まれ) に関する記事が, 小平稲門会 (東京都小平市を中心にした早稲田大学の同窓会) のホームページ上で見つかった。小平稲門会のご厚意で記事の主の石井道彌氏

<p>○ 叢書 コメニウス氏傳及ビ教育説 全一冊 定價金三十錢</p>	<p>○ 叢書 アレブール氏小傳及ビ幼稚園 全一冊 定價金三十錢</p>	<p>○ 叢書 ペスタロッチ氏ノ主義及ビ應用 全一冊 定價金三十錢</p>
---	--	---

發兌 普及舍
東京下谷區練堀町十四番地

山縣悌三郎, 『男女淘汰論』巻末の広告

(1929年生まれ)に連絡をとることができた。石井氏は、實氏と暁星小学校から早稲田大学まで同窓であったという。石井氏は調査の趣旨に理解を示して下さり、その結果、山縣武夫の二男・誠氏の子息(悌三郎の曾孫)の敬二氏と連絡をとらせていただくことができた。照会の結果、洋書や遺稿は伝わっていないということであった。

山縣悌三郎が、西洋文化の受容に果たした役割は、教育学に限っても大きい。ペスタロッチとフレーベルに関する最初の単著を物したのは山縣である。山縣の翻訳によって『教師之友』に掲載された『劣夫傑女譚』は、ペスタロッチの小説『リーन्हルトとゲルトルート』の初訳である。

『日本立志編 偉業亀鑑』(西村富次郎編、弘文館、1894年)には、上杉治憲、井上馨、木戸孝允、岩崎弥之助、渋沢栄一、勝海舟、岩倉具視、福澤諭吉、黒田清隆らに交じって、彼の略伝が掲載されている(34～38頁)。当時における彼の知名度をうかがわせる証左であろう。

補足3. 土井亀之進について

拙稿「戦前期日本におけるコメニウス言説再考2」でとりあげた土井亀之進の経歴について、新たに情報を得ることができた。とくに大正5年千葉県師範学校本科第一部卒業生によって1928年に出版された『足跡十二年』には、土井自身の回想が記されていた(15～17頁)。以下、前稿の内容及び官報その他から読み取れた情報をあわせて示しておく。

土井は、1866年に福岡・秋月藩士の家に生まれ、1886年に東京師範学校初等中学師範学科を卒業し、石川県師範学校を経て兵庫県尋常師範学校に赴任した。ここで二宮金次郎の生涯を記した『報徳記』に感銘を受け、兵庫県の柏原尋常中学校初代校長となった頃から、大日本報徳社長の岡田良平(1864-1934)の指導を受

けるようになり、報徳運動に積極的に関わるようになった²⁾。そして、東京高等師範学校研究科に再入学し、卒業論文は『二宮尊徳翁道徳経済論』(茗溪会、1906年)として公刊された。卒業後の1902年からは鳥取県師範学校校長を6年、1908年からは岡山県師範学校校長を5年、1913年からは千葉県師範学校校長を6年、1919年からは熊本県第一師範学校校長を4年務め、その後、報徳会の本拠地である静岡県掛川市の静岡県立掛川高等女学校校長を1927年まで務めた。報徳精神にのっとり生活ぶりだったことは、妻が『日本婦人の鑑』(改訂、婦人評論社編、1935年)の「現代婦人録第二輯」に収められていることからもうかがわれる(同書、93頁)。

没年が把握できなかったが、大日本報徳会に照会したところ、生前に与えられていた同社の名誉訓導の称号記録が、明治42年(1909年)5月24日から昭和10年(1935年)2月18日までで、「死亡により退任」となっていたという回答をいただいた[八木1980:953]。

補足4. 番外 田中広吉、『言語及読方の基本的研究』、目黒書店、1916年。

本書はコメニウスを主題にしたものではないが、当時の教育学研究の水準とそこでのコメニウスの位置づけを示す事例であり、ここに示す。

『言語及読方の基本的研究』は、1916年に、京都帝国大学教授の小西重直(1875-1948)の校閲を得て出版されているが、言語の起源や生理作用にまでさかのぼって説き起こした浩瀚なもので、第6章「読本の変遷に関する研究」を中心に、コメニウスについての言及が見られる。299ページにあげられている第6章第1節の参照文献は次のとおりである。

- A) Kehr, *Geschichte der Methodik des deutschen Volksschulunterrichts*, Band I, 1889. — Fechner, *Geschichte des Volksschules-Lesebuches*

- B) Huey, *The Psychology and Pedagogy of Reading*, 1910.
- C) Reeder, *Historical Development of school Reader and of Method in Teaching Reading*, 1900.
- D) St. Hall, *Educational Problems*, Vol. II, 1912.
- E) Comenius, *Orbis Pictus*. Willson

一目して明らかなように、当時の欧米における当該分野の研究文献があがっている。カール・ケール (Carl Kehr, 1830-1885) はドイツの学校教育学者で、その著書 *Die Praxis der Volksschule* は、1880年という早い段階で、文部省によってツェ・ケール著『平民学校論略』として出版されている (村岡範為馳訳, 平野知秋校)。同書に寄稿しているハインリヒ・フェヒナー (Heinrich Fechner, 1845-1909) には読本についての著書がある。エドモンド・ヒューイ (Edmund Burke Huey, 1870-1913) はアメリカの教育心理学者、ルドルフ・リーダー (Rudolph Rex Reeder, 1859-1934) はアメリカの教育学者、スタンレー・ホール (Granville Stanley Hall, 1844-1924) は、新教育にも影響を与えたアメリカの心理学者である。

田中は、欧米の読本に、宗教的、道徳的、実科的、言語的、文学的、総括的という6つの時代区分が見られるというフェヒナーの説を引きながらも、それらの要素は截然と時系列的に並ぶものではないことに注意を促しつつ、読本の歴史を概説するなかで、コメニウスの『世界図絵』について、次のように解説している。

「17世紀から、18世紀にかけて、次第に発達して来た科学、ことにその有形科学の発達につれて、動植物・天文・地文・物理の如き実科的材料は、ことに多くの読本に採用せらるるようになったのである。この傾向の魁をなしたものは、彼の有名なコメニウス Comenius である。氏は1657年か8年かに、ニュルンベルクにて

通例オルビスピクツス Orbis Pictus すなわち図解読本を公刊した。これは教科書に絵画を使用した嚆矢といわれている。この教科書は、欧州大陸において、ほとんど1世紀以上も流行したという、大勢力をもっておった。〔中略〕これが十種の欧州語と4種のアジア語に訳せられたということである。この読本においては、それぞれの題目はその図解をもっておる (挿絵の総数150に達す)。しかしてその題目の下に、ラテン語、英語、あるいは他国語についての説明文をもっておる。しかしてその序言において、コメニウスは、図解によって事物を観察させると、その図にちなんでも書いてある題目を、いかに読むべきかを暗示することができ、長い綴字をたどって発見する必要がなくなる。すなわち綴字法を知らない初学者には、非常な利益であるということを極言しておる。」(286~287頁)

同書の286ページには、*The New England Primer* の1ページが紹介されている。これは、17世紀イギリスの出版者で、のちにアメリカに渡って活躍したベンジャミン・ハリス (Benjamin Harris, c. 1647-1720) が出版し、植民地期のアメリカで初歩の読本として普及したもののだが、「その読本には絵画を挿入したが、これはコメニウス Comenius に倣うたという事は、誰も疑わぬ所である」〔同: 283〕と書かれている。『世界図絵』の導入部分には、動物等の挿絵とともにアルファベットの発音を学べる工夫がなされているが、ハリスが宗教教育の促進という意図を込めてコメニウスのアイデアを翻案したことが、一目瞭然である。

用いられた『世界図絵』は、イギリスの聖職者・教育者のチャールズ・ホール (Charles Hoole, 1610-1667) が翻訳し、1659年に初版が出たラテン語英語対訳版かその再版であると考えられる。

ホールによる英訳版は、1659年から1777年までの間に12ないしは13版が出ている [井ノ口 2016: 159-161]³⁾。井ノ口淳三氏の教示を仰いだところ、ジョンソン、ヒューイ、田中の用いた挿絵は、1659年版と1672年版とは章題の配置が異なっており、1689年版及び1700年版も挿絵は共通しているが本文の区切り方が異なるということであった。なお、1729年版では「入門」が1章に数えられ、ゆえに「理髪店」は76章となり、これは1777年版でも同じである。幸い、インターネット・アーカイヴで1705年版の英訳『世界図絵』を閲覧できたが、ジョンソンが利用したのはこの版である可能性が高い。井ノ口氏からも同様の判断をいただいた。

ジョンソンの著作には、引用された英訳『世界図絵』はアメリカの著名な出版業者ジョージ・プリンプトン (George Arthur Plimpton, 1855-1936) の所有であると記されている [Johnson 1917: X]。プリンプトンは、とくに教育分野の稀覯書の収集で知られ、そのコレクションは、ウェルズリー大学やコロンビア大学に寄贈された。両大学図書館に照会したところ、ウェルズリー大学には19世紀以前の英訳『世界図絵』は所蔵されていないとのことだったが、コロンビア大学のRare Book and Manuscript Libraryからは、プリンプトンのコレクションには、1672年と1705年の英語版と、1763年の要約版があるとの回答を得た⁴⁾。これにより、ジョンソンが利用したのは1705年版であると考えて、まず間違いはない。

さて、田中の文中には以下の記述があった。

「コメニウスの絵入読本の、他の半面である単語法に倣って、形式に重きを置いたものは、

非常なる勢いをもって流布し、かつ時代の上からも、年代の上からも、非常な勢力を持つに至ったのである。これらの形式的材料を主とした読本の編纂趣旨は、主として形式の取得に重きを置き、あわせて実際の文法・正字法・作文法等の教授に便せようとしたものである。したがってその排列は、まったく形式的で、内容上の連絡に重きを置かないから、没趣味に陥ることが多かったのである。」(289頁)

この言及はヒューイの書には見当たらなかった。他の参照文献の記述に依拠したものか、田中自身の考察によるものであるかまでは調査しなかったが、コメニウスは、『世界図絵』に先立って『開かれた言語の扉』を編纂する際、当時の教科書の形式主義を批判し、独自の哲学的体系であるパンソフィア (汎知学) の世界観に基づいて内容を構成した。コメニウスがもっとも重視した意図は、絵画の導入という画期的な創案の影に隠れたのか、後代の教科書編纂には受け継がれなかった。そのことは、幼少期に『世界図絵』に親しんだ文豪ゲーテが批判的に言及している [相馬 2018: 61-62]。

ところで、『言語及読方の基本的研究』では、第6章第1節「欧米に於ける読本の変遷」のあと、第2節で「我が邦に於ける読本の変遷」が扱われている。実語教、いろは歌、難波津と安積山の手習い歌、新実語教、童子教などがとりあげられているが、コメニウスの『世界図絵』のわずか8年後に初版が出た中村惕斎 (1629-1702) の『訓蒙図彙』はとりあげられていなかった。

著者の田中広吉は、ウェブサイト上の各種情報を総合すると、広島高等師範学校を卒業後、愛媛県師範学校附属小学校主事、岡山県師範学校附属小学校主事を務めた後、京都帝国大学文科大学に学び文学士の学位を得て、再び教職に復帰し、奈良女子高等師範学校教諭、京城女子高等普通学校教諭、朝鮮総督府視学官を歴任し

た。

戦前期の指導的な教育学者の一人である篠原助市(1876-1957)は、1920年、ソウル(当時の京城)を訪問し、1日3時間の講演を5日間行い、デューイの教育思想について論じたが、これは京都帝国大学の2年先輩であった田中の招きによるものであったという〔篠原 1956: 228〕。

その後の情報がつかめなかったが、「広島高師卒業生データベース」を構築している東洋大学の山本一生氏に教示を仰いだところ、三重県出身で1906年に博物学部を卒業し、1924年以降の記録は「死亡」となっていたということであった。当時、朝鮮で発行されていた『朝鮮教育会雑誌』、『朝鮮教育時報』、『文教の朝鮮』の目次を調べたが、田中の寄稿はなく、追悼記事も見出されなかった。

田中の著書には、『实际的教授訓練の基礎』(藤井徳三郎と共著、広文堂書店、1913年)、『新教科書挿画の解説及取扱法』(広文堂書店、土井亀之進校閲、1913年)といった教育実践に直接資するような内容のもののほか、『信仰を基とせる道徳的陶冶の研究』(宏文堂書店、1914年)のような作品もある。同書は、徳育重視の時代の風潮のなかで、かなり参照されている。また、『ゲーリー式の学校』(大阪屋号書店、1918年)は、アメリカのインディアナ州ゲーリー市で初代教育長ウィリアム・ワート(William Wirt, 1874-1938)が主導した新教育運動の先駆となった取り組みをいち早く紹介したものである。

むすびにかえて

日本で最初にコメニウスが活字で紹介されたのは、アメリカのライナス・ブロケット(Linus Pierpont Brockett, 1820-1893)の教育史テキストの翻訳によってであったが、その訳者の西村茂樹(1828-1902)は明治天皇、皇后の侍講を

務め、日本弘道会を創設した。オスカー・ブラウニング(Oscar Browning, 1837-1923)やフランクリン・ペインター(Franklin Verzelius Newton Painter, 1852-1931)の教育史テキストを翻訳した杉浦重剛(1855-1924)は、文部省派遣留学生としてイギリスで学んだ経験を有しつつも、昭和天皇と2人の弟に倫理を講じた国粋主義的思想家であった。前出の土井亀之進は報徳運動で指導的役割を果たしていた。

そして、このほかにも、多様なバックグラウンドを有した日本人がコメニウスに言及している事実がある。ここでは、1930年代以前の事例を4つあげておきたい。

第一は、コロンビア大学に日本文化研究所を設立したことで知られ、ドナルド・キーンの師でもあった角田柳作(1877-1964)である。『新仏教』第5巻第7号(新仏教徒同志会、1904年)には、彼の「基督教の人生観」と題した論考が収められているが、次のような言及がある。

「Contemptus mundi(世を蔑す)と、Amor christi(キリストを慕う)とはキリスト団体が住する秘密の聖堂を蔽う窓帷〔カーテンのこと〕の上に銘記せられたる二大文字なりきとはアモス、コメニウス〔原文ではコメニウス〕が「世界の迷路と心霊の樂園」という書中に記すところにあらずや。」(544頁)

この言及は、キリスト教の現世拒否的な世界観が論じられている下りにある。コメニウスの青年期の著作でチェコ語文学の古典とされる『地上の迷宮と心の樂園』(*Labyrint světa a ráj srdce*)は、本連載ですでにとりあげた本荘太郎(1863-1927)の『教育古典』で、『世界の迷路及胸裡の天堂』との表題で言及されている〔本荘 1894: 12〕。角田が言及した箇所は、主人公である巡礼が現実世界の虚栄に絶望した末に神の声を聴いて自身の心に帰り、神との邂逅を経て再び世界に戻る過程が描かれた第41章の冒頭にある。

「私は、どこで下僕たちを見逃がしたのか思い起こして立ち上がると、いそいそと進んで行きました。あまり急いでいたので、地上のどよめきが周りで起こっても、もはやそれに注意を払うことは決してありませんでした。キリスト教という名の寺院に入って行き、その寺院の最も奥の樹皮でできた区画のところ幕、すなわち覆いを見つけると、他の宗派と推測されるところにはまったく目もくれずに、直接その区画に入りました。そこで都合良く、かつまっ先に、隅の後ろに何があるのかを理解できたのです。それはキリスト者の実践、言い換えると、キリスト教の真理という表題でした。そのベールは二重になっていました。表から見ることのできる外側のベールは暗い色で、地上の人々による蔑視と呼ばれていました。なかにあるもう一つのベールはきらびやかで、キリストの愛と呼ばれていたのです。私は、その場所がそれら二つのベールで囲まれて、他から区別されているのが分かりました。しかし、内側のベールは表からは見ることができませんでした。その幕の後ろに入って行く者は誰でも、他の人々とは違って、たちまち祝福と悦びと平安とに満たされたのです。」[コメニウス 2006: 198]

角田がどのような経緯で『地上の迷宮と心の楽園』を知り引用したかは興味を引く問題だが、19世紀ドイツの哲学者・教育学者のフリードリヒ・パウルゼン (Friedrich Paulsen, 1846-1908) の主著『倫理学体系』(蟹江義丸、藤井健治郎、深作安文訳、博文館、1904年) の第2章「基督教の人世観」には下記のような極めて似通った記述がある。

「アモス、コメニウス[原文ではコメニウス]の著、『世界の迷路と心の楽園』に記せる所によれば、世界を軽侮せよキリストを愛せよの2語は、キリストの真の団体が住せし秘密の聖場に懸けられし2幕の上に銘せられたるの言なりと。しかりただ世界を軽侮するのみにては、い

まだ真のキリスト教にあらず、キリストに対する愛なくんば、これショーペンハウアー流の厭世主義か、ニーチェ流の専制道徳に終らんのみ。これに対してキリストに対する愛のみあるも、いまだキリスト教は成立せず、キリスト教は両者相並存して始めて成る。」(130頁)

角田の文章と『倫理学体系』の訳文には違いがあるが、これは角田がパウルゼンの原著を参照したからだろう。彼は、こののち仏教の布教のために1909年にアメリカに渡り、ハワイの本派本願寺中学校長を経て、ニューヨークに移った。

なお、この件に関連して、日本教育史研究者の久木幸男(1924-2004)が、すでに1970年代初頭に別の事例についてとりあげていたことを知った。大正自由教育の代表的な実践家の一人に、「池袋児童の村小学校」を設立したことで知られる野口援太郎(1868-1941)がいるが、彼が姫路師範学校長だった際に私立姫路高等女学校長を務め、野口と交流した一人に近藤純悟(1875-1967)がいる。近藤は、仏教思想家の清沢満之(1863-1903)の弟子だが、清沢満之の25年忌記念出版『清沢満之』(観照社、1928年)所収の「巨鐘の音」に次のように記している。

「私は研究院に在って「宗教と教育」について研究しておった。特に僧侶から教育に熱注したコメニウスを研究しておった。彼が信仰の径路を記した『世界の迷路』(ラビリンス、オブ、ザ、ワールド)はバンヤンの『天路歷程』にも比すべきものと愛読し、ボヘミアの文学などを漁っておった時であった。」(224～225頁)

近藤は、清沢が学監(学長)となった東京・巣鴨の真宗大学の研究院で宗教と教育という観点からコメニウスを研究していた。しかし、病を得た際に、養子に入っていた寺院のある姫路の高等女学校の校長の話があり、清沢の助言を受け、教職に就くことになった。その際の心境を「自らコメニウス気取りでおった」(同 225頁)

と記している。

また、清沢が創刊した雑誌『精神界』の第12巻第7号(1912年)所収の「常人の半生」(四)には次のように書かれている。

「私は最初から柄にもなく教育ということが好きであったが、高等学校に入りたい気はなかったが、高等師範に入ろうかと思うて、その規則まで取り寄せたことがあった。けれども私の頭には自分の僧侶であるということが強く響いた。〔中略〕この考えの、多少頭にある私には、断然教育界に身を投じてしまうということは到底できぬのである。〔中略〕私は研究で、研究院中、近世教育界の曙光といわれるコメニウス氏のことを研究した時に、彼がモラビアの一僧侶であって、教育のために非常に尽くした、彼は、教育をもって宗教家の間接の仕事とは云わなんだ、教育その物の上に、宗教的活動を認めておった。これに多少私淑した私は、この両方が水火相容れず、ぜひ一方にせねばならぬとは思わなんだのであります。」(59, 60^頁)

宗教と教育の関係は、コメニウスが自身に問い、周囲からも問われ続けた課題であった。しかし、啓蒙主義の興隆を経てコメニウスが再評価された19世紀、コメニウスはもっぱら世俗主義的な意味での教育という角度からとらえられた。この意味で、コメニウスが抱えた問題を近藤が自らの問題として引き受けて考察したというのは興味深い事実である。

久木が指摘するように、「近藤のコメニウス研究は、わが国におけるそれとしては、きわめて早期に属するということができる」〔久木1971: 68〕。しかし、久木が近藤の子息に尋ねたところでは、近藤の「研究ノート、蔵書などの一切は戦災で焼失した」という〔同〕。現在のところ、近藤によるコメニウスへの言及は見当たらないが、たとえば、清沢との間でコメニウスが話題になったことは十分に考えられる。

ボヘミアの貴族で歴史家として知られ、チェ

コスロヴァキアの独立運動に関わったフランティシェク・リュツォウ (František Lützow, 1849-1916) による『地上の迷宮と心の楽園』の最初の英訳が現れたのは1901年のことであり、この英訳を読んだとしても、その出版直後ということになり、近藤のコメニウス研究はきわめて専門的かつ独創的であったといえる。第二次世界大戦後、日蓮の信奉者がコメニウスに注目した事例については指摘したが〔相馬2018: 246-247〕、それに先立って親鸞の信奉者もコメニウスに相当の関心を寄せていたのだった。仏教者の西洋教育思想受容については、さらに検討する余地がある。

第二は、東京帝国大学文科大学哲学科に学び、東洋大学、第五高等学校、國學院大學教授を務めた戦前の代表的な神道学者の一人である田中義能(1872-1946)である。

出版社の同文館は、8大辞典の発行などにより、戦前期の主要な専門書出版社としての地位を確立した(1944年に三省堂と統合し、戦後再び独立)。1903年には全4冊の『教育辞書』、1907年から1908年にかけては『教育大辞書』を発行している(同書は1918年に増訂改版発行)が、『教育大辞書』の「コメニウス」の項の執筆者が田中なのである。田中の執筆内容については、別稿で教育事典(辞典、辞書)におけるコメニウスについての言及を検討する際にあわせて論じるが、田中はコメニウス以外にも、「学校教育、家庭教育、家庭教師、教育の可能、教育の限界、研究法、胎教、ニーマイヤー、バゼドウ、ピタゴラス、フランケ、ペルシアの教育、ホメロス、キリスト、ユダヤの教育といった項目」を執筆している。キリストの紹介記事の冒頭には、「上下二千年、盲目的に奇蹟を信じたる教徒のために、まったく人の子ならずして神の子とせられ」(増訂改版, 1526^頁)といった記述がある。

第三は、文豪・森鷗外(1862-1922)である。

1913年に彼の翻訳により出版された『ギョオテ伝』(富山房)は、少年期のゲーテがコメニウスの『世界図絵』に親しんだことが日本語で最初に紹介された例であろう。

「兄妹は最初の課業を父に受けた。アモス・コメニウス〔原文ではコンメニウス〕のオルビス・ピクツスやゴッドフリートの年代記に本づいて教えたのである。」(9頁)

第四は、軍閥や財閥批判を展開した新聞記者、評論家の鶴崎鷺城(1873-1934)である。政教社の雑誌『日本及日本人』第114号(1926年12月15日号)には、鷺城学人のペンネームで、「マサリツク博士=国小なるも人物大=」と題した人物評論が掲載されている。文中には、チェコ「民族にはアジア人の血が混じっている」ので「日本人にとって他人のような気がしない」(34頁)といった、おそらくハンガリーと取り違えたと思われる言及もあるが、チェコスロヴァキア第一共和国で盛んに行われたマスゲームなどのソコル運動の紹介を中心にチェコの歴史に触れる下りで次のように書かれている。

「この国からは古来幾多の殉国者、改革家、学者が出たが、深く国民の頭に刻まれている代表的3偉人はヤン・フス、コメニウス〔原文ではコメニアス〕とヘルチツキーで、特にフスは国民的正義と民主的自由を国民に教えた。」(35頁)

次稿以降でとりあげるが、第一次世界大戦後のチェコスロヴァキアの独立にともなって、コメニウスはチェコ民族の歴史との関連で言及されるようになる。鶴崎の言及はその嚆矢といえる。

こうした事実は、日本における西洋教育思想の受容の特質を再考する際の論点となるだろう。今後、さらに考察を進めていきたい。

(続く)

〔注〕

- 1) 大日本教育会の『教育公報』(第183号, 1896年11月)の雑録には、コメニウスの幼児教育論の英訳や英語によるコメニウスの紹介書を著したウィル・セイモア・モンロー(Will Seymour Monroe, 1863-1939)による「欧州の教育博物館及び教育図書館」と題された記事があるが、ドイツの事例としてベーゲル(原文ではビーゲルと表記)のコメニウス研究と図書館設置について紹介されている(19頁)。
- 2) 土井のあとをうけて柏原尋常中学校の校長となった大江磯吉(1868-1902)は、島崎藤村(1872-1943)の小説『破戒』の主人公・瀬川丑松のモデルであったといわれる(兵庫歴史学会、『兵庫史学研究:会誌』, 第43号, 1997年, 58~59頁)。
- 3) 『コメニウス教育学の研究』(井ノ口淳三, ミネルヴァ書房, 1998年)の174ページから176ページでは、英訳『世界図絵』の再版について検討されているが、その後、1729年版の存在が確認された。したがって、英訳版は1777年版までに12ないしは13回現れたと考えられる。
- 4) 念のために、「1763年の短縮版」についても照会したが、これは、ジェームズ・グリーンウッド(James Greenwood, ?-1737)による*The London Vocabulary, English and Latin*, 1763.であった。プリンプトン・コレクションの登録情報には、An abridgment of J. A. Comenius'Orbis pictus. Cf. Dict. nat. biogr. 3d.ed., 1713. とあったとのことであった。

〔引用(参考)文献〕

*本文中に書誌と参照ページを示した文献は除く。

コメニウス 2006.『地上の迷宮と心の楽園』, 藤

- 田輝夫訳, 相馬伸一監修, 東信堂。
- 井ノ口淳三 2016.『コメニウス「世界図絵」の異版本』, 追手門学院大学出版会。
- 萩野富士夫 1987.「山縣悌三郎小論」, 山縣悌三郎,『児孫の為に余の生涯を語る——山縣悌三郎自伝——』, 弘修社。
- 郡司良夫 1986.「明治時代の出版書目に現われた分類項目の変遷」,『大学図書館研究』, 第29巻。
- 篠原助市 1956.『教育生活五十年』, 相模書房出版部。
- 相馬伸一 2018.『コメニウスの旅——〈生ける印刷術〉の四世紀』, 九州大学出版会。
- 相馬伸一 2020a.「戦前期日本におけるコメニウス言説再考」,『佛教大学教育学部論集』, 第31号。
- 相馬伸一 2020b.「戦前期日本におけるコメニウス言説再考2」,『佛教大学教育学部学会紀要』, 第19号。
- 相馬伸一 2021.「戦前期日本におけるコメニウス言説再考3」,『佛教大学教育学部論集』, 第32号。
- 久木幸男 1971.「野口援太郎と近藤純悟」,『横

浜国立大学教育紀要』, 第11号。

- 本荘太郎 1894.『教育古典』, 博文館。
- 八木繁樹 1980.『報徳運動100年のあゆみ』, 龍溪書舎。

〔謝辞〕

本稿を成すにあたって, 山縣悌三郎の孫・山縣實氏のご友人の石井道彌氏, 山縣悌三郎の曾孫の山縣敬二氏, 東洋大学の山本一生氏, 大日本報徳会のご助力をいただいた。記してお礼申し上げます。

〔付記〕

本稿は, 科学研究費補助金・基盤研究(B)「教育思想史のメタヒストリー的研究」(17H02673)及び科学研究費基盤研究(C)(一般)「西洋教育思想の受容過程の検討をととした教育思想史像の再構築」(21K02205, 研究代表者: 岸本智典)による研究成果の一環である。本研究の過程で明らかにできなかった点は本文中に記載しているが, ご教示をいただければ幸甚である。

(そうま しんいち 教育学科)

Abstract

A Reconsideration of the Discourses of J. A. Comenius in Pre-War Japan (6)

Shinichi SOHMA

This thesis is a part of comprehensive survey of discourses of J. A. Comenius in prewar Japan. In the late 19th century, when the national education system was established, the 17th century Czech thinker Johannes Comenius was introduced as a precursor of modern education. Investigation of the process of his reception will contribute to a deeper understanding of the reception of Western education in modern Japan. The Digital Collections of the National Diet Library, which were renewed last year, have enabled a cross-sectional survey of specific words in a variety of documents. For example, an article on Comenius in the Education Magazine of Chiba Prefecture published in 1882 was revealed to have been based upon the article written by Ippo Kimura (1850-1901), who was involved in compiling the first encyclopedia in the field of education in Japan. This paper presents some facts that could not be followed within the period covered in previous studies.

